

バッハと共に過ごした 7 月 28 日

森 彬 (後援会員)

去る 7 月 28 日はご存じのようにバッハの命日にあたります。彼は 250 年前のこの日、ライプツィヒで天に召されました。享年 65 歳でした。

この記念すべき日に、世界中のバッハをこよなく愛する人々は、それぞれの感慨をもってバッハとの一日を過ごしたにちがいありません。皆さんはいかがでしたか。東京バッハ合唱団の後援会員のひとりとして、私なりにバッハと過ごした〈7 月 28 日〉を振り返ってみたいと思います。

まず、CD でカンタータ第 106 番〈神の時こそいと良き時〉を聴いたこと。

この曲を選んだのは、〈哀悼行事〉(Actus tragicus) のカンタータとして知られていて、バッハの命日にふさわしいと考えたからです。1707 年、22 歳のバッハが伯父にあたるトビアス・レンマーヒルトの葬儀のために作曲したといわれ、青年期の名作として、のちの諸傑作以上にこの作品を愛する人々が少なくないようです。

大村恵美子先生はこの曲について、「壮年期の力強さはまだなく、それがかえって初々しく神聖・純粹の極致をしのばせてくれる」(『バッハの音楽的宇宙』4 頁) と評しておられます。

私も以前からこの曲に魅かれ、CD は最近の鈴木雅明盤を含めて 6 種類持っていますが、去る 7 月 28 日には、このたびバッハ合唱団から刊行された『バッハ・カンタータ 50 曲選』第 1 期分に収められている第 106 番の楽譜を膝の上にひろげながら、リヒター盤で聴いたことです。

冒頭は「ソナティーナ」と題される器楽曲で、ブロックフレーテとヴィオラ・ダ・ガンバ (各 2) がひなびた響きの中にも情趣あふれる音楽を奏でます。惻々と、しかし決して悲痛な感じというのではなく、むしろ穏やかで雅びな調べが心にしみる思いです。

音楽は途中、不協和音と半音階進行によって死の恐怖を浮き彫りにし、聴く者を絶望へと追いこむかのようなのですが、いきなりそこへソプラノが澄みきった明るさで入ってきて、「然り、主イエスよ、来たりませ」(ヨハネ黙示録 22:20) と歌います。

教会音楽史の専門家ハンス・プロイスは、バッハ

は、子供たちがクリスマスの到来を前にして味わうあの期待にみちた喜びに通じるものがあると述べ、その消息を最もすばらしい形で伝えている作品の例として、このカンタータ第 106 番をあげています (角倉一朗・渡辺 健編『バッハ頌』261 頁)。

また、礪山 雅氏はこのカンタータについて、「死における信仰の意義をこれ以上印象深く描き出した芸術が、いったいほかにあるだろうか」(『バッハ＝魂のエヴァンゲリスト』42 頁) と述べておられますが、同感であります。

リヒター盤の引き締まった、それでいてしっとり潤いのある演奏をとおして、あらためて第 106 番のすばらしさに魅せられたことです。

つぎに聴いたのはホ短調のフルート・ソナタ (BWV 1034)。演奏はフルートが J-P. ランパル、チェンバロが T. ピノック、チェロは R. ピドゥで、1986 年のレコード・アカデミー賞を受賞した CD です。第 3 楽章のアンダンテなどはモーツァルトも顔負けといっている位たおやかなメロディーで、聴く者の心をおのずと桃源郷へといざないます。これまで要らぬ誤解や偏見からバッハを敬遠しているような人に、まず聴いてもらいたい曲のひとつといえましょうか。

さて最後に、バッハの命日の聴き納めとして CD ラックから取り出したのは〈音楽の捧げもの〉(BWV 1079) — 数あるバッハの作品群の中から 1 曲を、と言われたら、私は迷わずこの曲を選ぶでしょう。蒐めた CD も 20 種類をこえました (我ながら、モノマニアックと思わないでもありませんが…)

ご存じのように、これはバッハの遺言ともいえるべき最晩年 (1747 年) の作で対位法の粋をこらしたのですが、一見いかにも古色蒼然たる趣きのように、じつは驚くほど新しく、ラディカルでさえあります。この中の「6 声のリチェルカーレ」をウェーベルンが編曲していますが、偶然の試みというのではなく、現代の 12 音音楽の作曲家とバッハの取り合わせは、私にはけっして奇異なことと思えないのです。

古くて新しい — 〈音楽の捧げもの〉ほど、この逆説的な形容の似つかわしい曲はないのではないのでしょうか。

アルベルト・シュヴァイツァーはかつて、「バッハは一つの終局である。彼からは何ものも発しない」（白水社刊『バッハ』上、26頁）と語りました。けれども、私は彼のこの評言にいささか異を唱えたいのです。とりわけ、＜音楽の捧げもの＞を聴けばきくほど、すべてはバッハで閉じられたのではなく、彼によって開かれている、との感を強く覚えさせられるのです。バッハはこれからも、私たちにいまだ知られざる新しい貌（かお）を時代ごとにのぞかせてくれるであります。

バッハと共に至福の時を過ごした一日でした。

2000年野尻湖合宿報告

藤吉 博幸（団員）

今年の6月に入団し、初めての合宿参加となりました。僭越ではございますが、報告&感想をしたためさせていただきます。

【野尻湖コンサート】

今年度は、8月4日（土）恒例の神山教会で行われました。曲目は、カンタータ106番、小ミサ曲ト長調、そして、ヴァイオリニスト小田幸子さんによる独奏、バッハ＜無伴奏ヴァイオリンソナタ＞第1番（BWV1001）よりアダージョとソナタでした。

1階席、2階席共かなり席が埋まるほどの聴衆の中、コンサートは開演されました。ほとんどの団員の方は、87回定期演奏会で歌われた曲であり、より深い演奏ができたのではないのでしょうか。演奏会では独唱者が歌う箇所を団員が歌いました。特に小ミサ曲の「Domine Deus」はソプラノとアルトが上品に歌われていた上、ピアノ伴奏に加え、小田さんのヴァイオリンが伴奏に入ること、この曲のもつ雰囲気が一層よく醸し出されたと多くの方が感じ取ったに違いありません。

日本の地で、バッハ演奏を聞いた外国の方は、どんな感想をもたれたのでしょうか？

【ミニ・コンサート】

今回は6組の出演者がいらっしゃいました。団員による厳正な審査の結果、第1位には、お子さまのリコーダ演奏が好評でした松尾ファミリー、第2位には、恒例の「冬の旅」から歌われた室田悟さん、第3位には、演出も素敵でした川合満里子さんが選ばれました。

次回は、年末クリスマス会に行われるとのこと



すが、コスチューム等の演出も決め手になるのでは、

と団員の中では噂されていました。是非凝った演出で、聴衆を魅了してくださいませ。

【練習の雰囲気】

レイクサイドホテル内の練習会場は湖の岸辺に浮かぶ建物なので、三方を湖に囲まれて、歌声が清涼な風に載せて湖面一杯に響き渡るような気がしました。

【野尻湖と自由時間】

合宿の前半は、自由時間が多くありました。また、神山教会コンサート、宴会の後の次の（最終日）早朝から、サイクリングに出かけた方々のバイタリティーとスタミナには敬服します。ほとんどミニ・トライアスロン状態だった方もいらっしやったようです。

【感想】

合宿中に教会でコンサートができること、前回演奏会のプログラムを、独唱部分を含めて団員だけで演奏すること、ヴァイオリニストとの共演が今回のような形で実現したこと、等々40年弱バッハ専門の合唱団として培った実績や、主宰者である大村先生の情熱などを感じた合宿でした。

また、開発されすぎずに以前のままの姿を残す野尻湖界隈の静かなリゾート地を楽しむことができ、とてもよい経験になったと思います。次回は合宿前後は仕事を控えめに、たっぷり遊べる準備をしておきたいと思った合宿でした。

カンタータ106番にも感動しています。9/9の特別演奏会には、更に一步自分のものにして歌いたいと思いました。でもよほど頑張らないといけませんね。

どうもありがとうございました。



中村雄二郎 著

『精神のフーガ 音楽の相のもとに』

(小学館 2000年6月刊)

大村恵美子

これは、著者が小学館の『バッハ全集』(全15巻)に発表された15章を、単行本にまとめられたものです。

「あとがき」によると、編集部の意向としては、「バロック時代の哲学・思想的なエッセーを」ということだったようですが、著者は、いま自分のいちばん書きたいものを、と考へ、「それは、〈精神のフーガ〉つまり、《音楽の観点から見た思想史》のようなもの」だったとのこと。

私が芸大楽理科(音楽美学専攻)の時代に、卒論にそなえて読みすすんだものの総ざらえのような形で、なつかしくも登場するのが—ピュタゴラス、ソクラテスからプラトンへ、アウグスティヌス、アシジのフランチェスコ/メシアン、ダンテ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、デカルト、ルソー、ディドロ、ヘーゲル、ニーチェ、マックス・ウェーバー、アドルノ、ドゥルーズ・ガタリ、そして最後にライブニッツとバッハ—という面々。

どの章もそれぞれに含蓄のあるもので、ヨーロッパというものを、あらためて概観するのに役立ちますが、やはり私の期待は、結論的にバッハがどのように描かれるかにありました。それにしては、個々の章にそれほどバッハに至るまでの伏線が目立つほどに施されているわけでもなく、ちょっと「待ちぼうけ」のまわり道が長すぎるように感じられます。

そして、だんだん終わりに近づいて、第11章ニーチェのところで、「なによりもディオニュソスとアポロンという二つの神格が出会い、重なるところに、ギリシャ精神の特色がある」と出てきたので、さては、それがバッハで展開されるのかと、大いに期待したところ、そうはゆかず、「音楽と哲学と数学の一致」ということで、アポロ的な面に終始した感があります。またライブニッツの「モノド論」からも、人間存在の深淵が、バッハの音楽に重要な要素となっているのに、そういうふうには言及されず、もっぱら純理的な面が強調されて終わってしまいます。哲学的な知識を音楽理論と知的に結びつけようとして、構えすぎたのではないのでしょうか。

しかし、ここに提出された数多くのヒントをたぐ

って行って、バッハに迫るといふ楽しみは、読者の側に、たつぷりと残されています。著者が直接には指摘しなかった、もろもろのヨーロッパ的内実を、各章ごとに、バッハを思い浮かべながら、各自が再構成してゆけば、かなり豊かなバッハ享受の醍醐味をあげることになるのではないのでしょうか。現代の切実な課題「音楽はどこへゆく」についても、しばし考察するよすがともなるのではないのでしょうか。そういうわけで、この本はバッハの記念年における〈硬派の〉成果の代表といえるのではないのでしょうか。

後援会会計報告

(2000年4月—6月)

収入	341,000
内訳 後援会費	313,000
寄付	28,000
支出	533,940
内訳 事務局費補助	210,000
渉外費	43,064
通信費	109,489
事務費	71,217
雑費(「新バッハ全集」5冊)	100,170
差引	△192,940
前期より	109,775
累計	△83,165

後援会にご入会の方々

(2000年4月—6月、敬称略)

[新入会員]

山本恵子、野村勝時、宮本弘子

[継続会員]

鈴木玲子、桜井和子、宮島信子、佐川行子、石代礼子、原田美知子、青木道彦、森泉百合子、渡辺さち子、楠 芳枝、福中 脩、清田礼子、勝沼 淳、丹羽 茂、G.ワルブレヒト、藤田光男、高橋浩子、石田美保子、三浦多佳子、吉村路子、砂川治子、橋本みどり、 芳人、岩瀬房子

[寄付]

安原幸子、秀村千穂子、東郷駿二、石田美保子

[切手多数]

小杉茂雄、板木 亮、落合和子

キリスト受難劇とバッハの故郷を巡る旅

(上)

大村 恵美子

今回訪れたのはドイツの10の町

JTB 主催、パラビジョン企画の、同上のツアーは、PR の努力も実らず、お流れとなってしまいました。私は、オーバーアマガウの受難劇は、2000 年を記念するのにふさわしい旅行目標と考えていましたし、没後 250 年というバッハの記念年に、彼の生まれた町（アイゼナハ）と死んだ町（ライプツィヒ）を訪れるのも、40 年近く彼の音楽専一に活動をつづけてきた者として、しごく自然なことだろうと思い、97 年の演奏旅行に参加できなかった大村健二とふたりで、個人旅行として、上記の企画どおりに、JTB のお世話で、2 日ずらせた形で旅してきました。泊まったのは 4 ヶ所、車で短時間に見とどけてきた町は 6 ヶ所、というあわただしさでしたが、97 年以来の変化は一目でわかりました。また、表面的な変化にもかかわらず、悠揚せまらぬドイツの深い文化の魅力も、あらためて感じました。

- 8 月 28 日 成田ーフランクフルトー①ライプツィヒ(泊)
- 8 月 29 日 ライプツィヒ(泊)
- 8 月 30 日 ②シュテルムタール、ライプツィヒ(泊)
- 8 月 31 日 ③ミュンヘンー④オーバーアマガウ(泊)
- 9 月 1 日 ミュンヘン(泊)
- 9 月 2 日 ⑤アイゼナハ(泊)
- 9 月 3 日 ⑥ミュールハウゼンー⑦ワイマラーー⑧アル
ンシュタットー⑨ドルンハイムー⑩ヴェヒマル、アイゼナ
ハ(泊)
- 9 月 4 日 アイゼナハーフランクフルト(機内泊)
- 9 月 5 日 成田着

成田を発った日の夜にライプツィヒで会食

8 月 28 日 (月)

成田発 10:10 予定のルフトハンザ機が通風バルブの蓋が開かないとかで、2 時間もおくれ、機内で動かぬまま待たされて、12:05 発となりました。この日は、昨年来日されたケルンのゲプハルト牧師からの連絡で、ライプツィヒで再会することとなり、18:00 にホテルで待ち合わせて、夕食をご一緒に、という予定なので、気が気ではありません。

16:35 (ドイツ時間) フランクフルト着。ずっと約 2 時間のおくれを引きずって、ライプツィヒのホ

テル・ルネサンスに到着。不安げにロビーで待ちつづけてくださったウルリケ (ゲプハルト牧師) に迎えられ、顔も洗わずただちに町へ出て、アウエルバッハスケラーへ。ここは旧市庁舎そばのアーケード内にある大きなレストランで、ゲーテが修学時代に愛用したというので、観光スポットとしてドイツ統一前後の不況期にも、ここだけはいつでも繁昌していました。

ウルリケが 3 日間滞在しているのは、かつての学友アンネ・マルティンさんの家で、電話でよばれて彼女も夕食に加わりました。昨年秋に開館した、このアーケードのすぐ隣の、ライブツィヒ・ドイツ現代史フォーラムの学芸員で、私が、バッハ博物館に、5 月に出版した「バッハ・カンタータ 50 曲選」を贈呈したく、館長あてに Eメールを送ったが、少しおそかったか、あるいは休暇中なのか、まだお返事をいただいていない、ということ、ウルリケから聞いていて、博物館どうしの電話連絡なら、事情がよくわかるから明朝やってみましょう、と心強い援軍の出現となりました。



■アンネ・マルティン(左)、ウルリケ・ゲプハルト(右)と

バッハ博物館に「カンタータ 50 曲選」10 冊を寄贈

8 月 29 日 (火)

朝 10 時から、大学の教授室のような、マルティン博士の事務室から、忍耐よく電話連絡をとりつづけていただき、ようやく出勤された、バッハ博物館のクルムビーゲル館長とつながり、さっそく徒歩数分で面会となる。ウルリケも同行して下さって大村 2 人と 3 人でお会いしましたが、この方も女性で、気さくなあかるい方。とても喜ばれて、こんな出版の大仕事や演奏活動など、ずいぶんお金がかかるでしょう、と親身に同情されました。そして、この館内でも、日本語で歌ったらどんな風に聞こえるのか、流したいから、テープか CD を送ってくださいと言われました。また、1983 年に、私たちがトーマス教

会で演奏したのを聴きになっていて、1997年に改革教会でも演奏したのは知らなかった、ぜひ来年にでも歌いに来られませんか、とのこと。もっと近ければ、と残念です。

ドイツに来て、何かとお世話になる方々がみんな女性なのも、私が女性ということもありましょうが、ドイツの社会を反映していると思います。あとで見学したアンネの新しい博物館も、大きなスクリーンでの映像をたくさん使って、大戦後の、全国蜂起や、壁崩壊や統一や、様々な大事件を、リアリティーたっぷりに紹介し（市民へのインタビューなどもとり入れて）、新しい時代の博物館のあり方を示唆しています。きめの細かさは女性特有でもあるが、全体の構想は大胆で男性的。ドイツ人には女性でもそういう男性的なよさがあるのですね。



■バッハ博物館にて、クルムビーゲル館長(左)と

昼食は、昔からライプツィヒ中の芸術家・文士たちのたまり場だった「カフェ・バウム」で。今朝の電話打合わせで、近郊に住むイルゼ・キーゼヴェッター夫妻とも出会い、アンネも一緒に6人の会食。ウルリケは、午後ケルンに向かうので、ここでお別れ。明日ホルツハウゼンのお住まいを訪問することにして、イルゼ夫妻ともお別れ、アンネはお仕事、私たち2人で市内見物へ。

ライプツィヒも、ひと頃はベルリンの再建築に主力を注がれて、相当荒廃していましたが、また外装を手入れしたりして、美しくなりました。昨夜は、主だった建物がイルミネーションに照らされていました。バッハ関係の店も、トーマス教会のまわりにもいろいろできて、ツアーリストを集めています。

トーマス教会内のバッハのお墓は、花束がいくつかかさげられている、ふつうの状態でした。でも今年は、イベントのある日ごとに、さぞかし飾られることでしょう。

旧市庁舎内の、バッハにゆかりの場所など、いくつかまわりましたが、どれも昔のままでした。ライプツィヒ大学の前、アウグストゥス広場（DDR時

代はマルクス・エンゲルス広場）に面して、かつてここにあった大学教会（パウリーナ・キルヘ）を再建しようというアピールが掲げられ、シンボルの枠組みができています。J. S. バッハが何かと交渉もった所ですが、こんなに立てこんだ今となっては、どうなのでしょう。昔のままに復元など、とても無理なのではないでしょうか。



■パウリーナ・キルヘのシンボルマーク、後ろはライプツィヒ大学

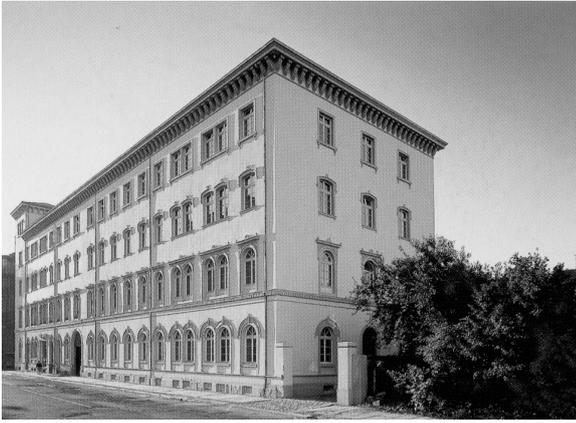
バッハゆかりの小村とメンデルスゾーン・ハウス

8月30日（水）

イルゼは今日13:00には用があるということで、早めの昼食までのおつき合いということで、9時にタクシーで近郊ホルツハウゼンのイルゼ宅へ。あい変わらずさっぱりと快適な住居。なつかしい周辺の道を、郵便を出しがてら散歩しましたが、郵便局がなくなって、小さなコンビニ風の店で郵便事務を扱っていました。日本も民営ならコンビニとのタイアップもいいかもかもしれません。

その後、14キロ離れた小村シュテルムターレへ。ごく平和な村ですが、中心にある教会は、バッハ年の計画の一環からか、大改装中で、名刺大のプレートに、バッハが1723年11月2日にここのオルガンびらきに演奏した、と記してあるのを見せられました。とても良いオルガンだそうです。埃がたまって、足場のわるい工事中でも、見たい人には解説などもしてちゃんと見せてくれるのがドイツ人の寛容なところ。そして作業中も真剣でとても静かなのです。あと1ヵ月余で工事は終わる予定で、バッハ年内にはまだ間に合うでしょう。りっぱなコンサートのできる日を期待します。

ライプツィヒ市内に近い中華レストランで食事をして、イルゼ夫妻とお別れ。そこから市内電車で新市庁舎へ。近くにあるエルスナー楽譜店で、注文してもなかなか来ないでいる楽譜を買う。さすがにみんな揃っています



■メンデルスゾーン・ハウス

そこから、すぐのはずのメンデルスゾーン・ハウスを探しますが、通行人にきいても知る人は少なく、2,3人の言うことには諸説あって、けっこう遠くに見つかりました。メンデルスゾーン晩年（といっても38歳で没）の住居だそうで、1997年開館なのでまだ展示物もこれからという感じでしたが、メンデルスゾーンが虚飾のない機能的な家で、創作し、市のため人々のためを一途にはかって音楽活動をした、その気風がよくわかりました。裕福で不自由のない生い立ちといっても、ユダヤ人の出身からプロテスタントに改宗し、できるだけ心を開いて、さらに落度のないよう身を律して、38年の短い生涯を社会に貢献しつつした心情が察しられます。

ミュンヘン — エッタール — オーバーアマガウ

8月31日（木）

ライプツィヒ空港からミュンヘン空港へ。この2日間の宿泊が、出る直前までできず、JTBとしては、なるべく快適な滞在になるように、あれこれ考えてくださったようで、私たちの希望もとり入れて、結果的には大満足の2日間となりました。1日目は、空港からガイドつきでミュンヘン市内をまわって、途中エッタール修道院にも寄って、オーバーアマガウのホテルに宿泊。2日目は、受難劇に一日がかり、朝・昼・夕食まで同じホテルで用意されて、夕方ミュンヘンに向かい、市内のホテル泊。ここは寝るだけの一泊ですが、翌朝のアイゼナハ行き移動に便利なのです。

さて初日のミュンヘンでの午前中は、アルテ・ピナコテーク見学。正午の市庁舎正面の人形時計を見る。午後はノイエ・ピナコテーク。はるか昔、留学時代に見たのも、部分的には思い出しました。でも、ウィーンのと混同した記憶も多かったようです。

その後またセダンのお迎えで、アウトバーンを時

速240キロも飛ばし、オーバーアマガウへ。途中、ごく近くにあるエッタールの修道院にも寄ってもらいました。ボンヘッファーが滞在して執筆したというところで、ボンヘッファー研究会の皆さんが数年前旅行して、すばらしかったと話しておられたので、何か、小高い山の上にそびえていて聖別されたような神々しいイメージをいただいていたのですが、それは外れて、幹線車道わきに面していて、入口の前ににぎやかなお土産店がずらりと並び、善光寺や日光などに近いものでした。カトリックの宗教建築物にはよくある図です。

広大な、花にみちあふれた庭を歩いてバジリカに入ると、ここも、オットーボイレンなどに似た、白と金とできらびやかに飾りたてられた内部。修道院として使われている部分には入れませんでした。これだけ大がかりなものを維持するには、観光も重要な手段なのでしょう。ここ製のビールも有名らしく、夕食のホテルのメニューにもものっていたので、黒ビールをたのみました。

宿は、劇場から3,4分のホテル・アルテポストという、典型的な当地の造りで、昔は郵便車を仕事としていたらしく、一台が飾ってあり、金文字で「プライジンガー」と記されていますが、なんと明日の劇にユダ役で出演するのが、当ホテルの若主人、アントン・プライジンガーでした。私たちを受付で迎えてくれたのが、長髪的美青年の本人その人で、劇中、このユダは、かなりの重要度をもって活躍することになるのです。



■ホテル・アルテポスト

まわりの客は、団体が多く、ドイツ語の人々、それにアメリカ人のツアーが多いそうです。ここへは、10年に1度の受難劇といっても、ホテルと込みで予約されて高価なので、近くのミュンヘンの人たちでも、なかなか来られないそうです。部屋の天井は低いいけれど、設備は何ひとつモダンなホテルに劣らず、家庭的であたたかい雰囲気です。【次号へつづく】